

## 教育課程特例校における特別の教育課程に基づく教育の実施状況と評価

### ◆はじめに

本校の特別の教育課程の内容については、以下のように構成されている。

学校設定教科:「グローバル探究」

含まれる科目:「教養」、「課題研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「国際理解Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「哲学」「キャリア」

各科目の実施学年

1年	2年	3年
教養		
課題研究Ⅰ	課題研究Ⅱ	課題研究Ⅲ
国際理解Ⅰ	国際理解Ⅱ	国際理解Ⅲ
哲学		
	キャリア	キャリア
	集中講座	

### ◆従来科目の代替えと評価方法

1年次開講の「教養」と「課題研究Ⅰ」(ともに1単位)は情報科の「社会と情報」(2単位)の代替えとして実施し、履修者には「社会と情報」の単位として5段階評価を実施した。

1年次開講の「哲学」は総合的な学習の時間で実施していたものを「グローバル探究」に組み込み、評価は合否とした。

2、3年次開講の「キャリア」は総合的な学習の時間で実施していたものを「グローバル探究」に組み込み、評価は合否とした。

その他、課題研究(Ⅱ、Ⅲ)、国際理解(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)については、総合的な学習の時間の評価にならない、評価は合否とした。

集中講座は、2年次に修学旅行の代替えとして実施している豪州語学研修及びホームステイ(12泊14日)を充てており、現地校で、「課題研究」で作成したプレゼンテーションの発表を行い、教室や現地の家庭で「国際理解」で学んだ異文化交流についての実践を行った。帰国後は、「課題研究」「国際理解」の授業内で各自報告書の提出を作成し、評価はしているが、単位としての発行はしていない。

### ◆実施方法と検証評価の視点

学校設定教科「グローバル探究」で実施される各科目については、アクティブラーニングによる教育手法により、「課題発見—課題研究—課題解決—発信」という流れで実施した。研究の成果は、校内外に対する発表を行うことで検証することを目指した。

その評価の視点を昨年度までの4点「①課題について、その発見から調査・検証を経たグローバルな課題解決力がついたか。」、「②プレゼンテーション能力が育成されたか。」、「③リーダーシップ

をとることのできる能力が育成できたか。」「④生徒・保護者・学校が三位一体となって、組織的かつ効果的に運営ができたか。」をさらに細分化し、評価の精度を高めることを企図した。最終的な評価は、グローバルに活躍できる土台となる海外大学への進学等、国際的な視野と志向をもつグローバル社会に有為な人材が育成できたかということであることには変わりはない。

2020年度に策定した評価は次の7指標によるものとした。

①主体性・積極性

任意参加の海外研修数、国内語学研修(夏休み、冬休み、春休み)への参加生徒数、WWL・SGH×探求甲子園など外部での研究成果発表件数、語学やディベートなど外部コンクールへの参加人数、海外留学者数、海外大学への進学者数

②異文化理解

海外研修行事の前後に行うルーブリック自己評価、生徒宅のホームステイ受入れ数

③課題探究・解決能力

ICT機器による共同作業の操作記録及び各グループの発話内容を記録し、「グループワーク」と「発話内容」を軸としたルーブリックを作成、それを利用した評価を行う。

④ICTスキル

生徒へのアンケート結果分析、ICTを活用した提出物、発表の評価

⑤外国語能力

英検2級(CEFR B1レベル)以上の合格者数、外国語コンクール(英語・中国語・フランス語)の出場者数、入賞者数

⑥プレゼンテーション能力

校内で実施する課題研究プレゼンテーションや提出された論文・報告書の評価、生徒各自によるルーブリック自己評価の分析

⑦コミュニケーション能力

定期考査において実施するスピーキングテストの結果、海外研修、海外生徒受け入れ事業への参加生徒によるルーブリック自己評価の分析

◆検証評価の視点による 評価結果

上記の7指標は相互に影響し合うものであるため、教育課程特例校における特別の教育課程に基づく教育の成果報告としての4点に絞っての評価をここでは記載する。

まず、その前提として、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画を大幅に変更せざるを得なかった。周知のように、海外との往来は全くと言ってよいほどなくなってしまった。

特別の教育課程遂行上必要な、必修の海外研修は国内研修に切り替えたものの、政府の緊急事態宣言発出等により、これまた再度の変更を余儀なくされ、校内研修に切り替えざるを得なかった。よって、2020年度は、生徒の海外派遣はゼロ、海外の生徒受入れはモンゴルからの生徒1名(6ヵ月間)のみであった。特別の教育課程に位置づけた学校設定教科「グローバル探究」の授

業科目は計画通り実施したが、昨年度までのような海外研修に関する写真や数値を挙げて説明できるようなものはないのが現状である。しかしながら、海外の大学への進学では、これまでは台湾を中心にアメリカや韓国等の大学であったが、今年度は中国の北京外語大学に4名合格し、進学することになったのは特筆できよう。

2020年度は海外との往来ができなかったことから、海外研修は「本当に必要か」「効果の高いものにするにはどうするか」など問い直すなど、一時立ち止まってグローバル教育の内容を見詰め直すことになった。コロナ禍であったからこそ、前例踏襲主義でしてきた事業を冷静に見詰め直し、質的転換を図ることの大切さに気付くことができたのではないかと思う。

### 1. 学校設定教科「グローバル探究」に関する評価

2020年度、学校設定教科「グローバル探究」は、中学校、高校の特進・グローバル・中高一貫コースの計794名を対象に実施された。英語・中国語・フランス語のスピーチコンテスト、ディベート大会、課題研究の校外発表に参加した生徒数は49名で、全員が「グローバル探究」履修者であった。文部科学省WWLコンソーシアム構築支援事業である全国高校生SRサミットFOCUS（立命館大学）へも参加することができた。

トビタテ！留学JAPANのこれまでの採用者7名のうち5名は「グローバル探究」履修者である。最後の募集となるはずだった今年度は選考途中で中止が発表されたが、本校からの応募者6名は、全員が「グローバル探究」履修者であった。同教科がプレゼンテーション能力の向上や主体性の育成に一定の効果を示した事を証明した事例であるといえる。

### 2. 海外研修に関する評価

2020年度予定された海外研修は、すべて中止となった。このうち中学2年生対象のフィリピン英語集中研修と中学3年生対象のオーストラリア海外研修については、代替行事として宿泊を伴う国内語学研修（福島イングリッシュキャンプと日光イングリッシュキャンプ）が行われたが、その他の海外研修については校内語学研修へと変更された。さらに、国内研修も緊急事態宣言発出等により、校内研修に変更せざるを得ない場合もあった。

海外の研修先とリモートによる交流等について、連絡・調整を図り、一部学校と試験的に行ったが、世界中がコロナ禍であって、平時ではないため、継続的、組織的に行えるまでには至らなかった。しかしながら、リモートによる海外交流は、昨年度までより多くの国や地域の学校との交流の機会を可能にする可能性も秘めており、そのインフラ整備を進める必要を感じている。

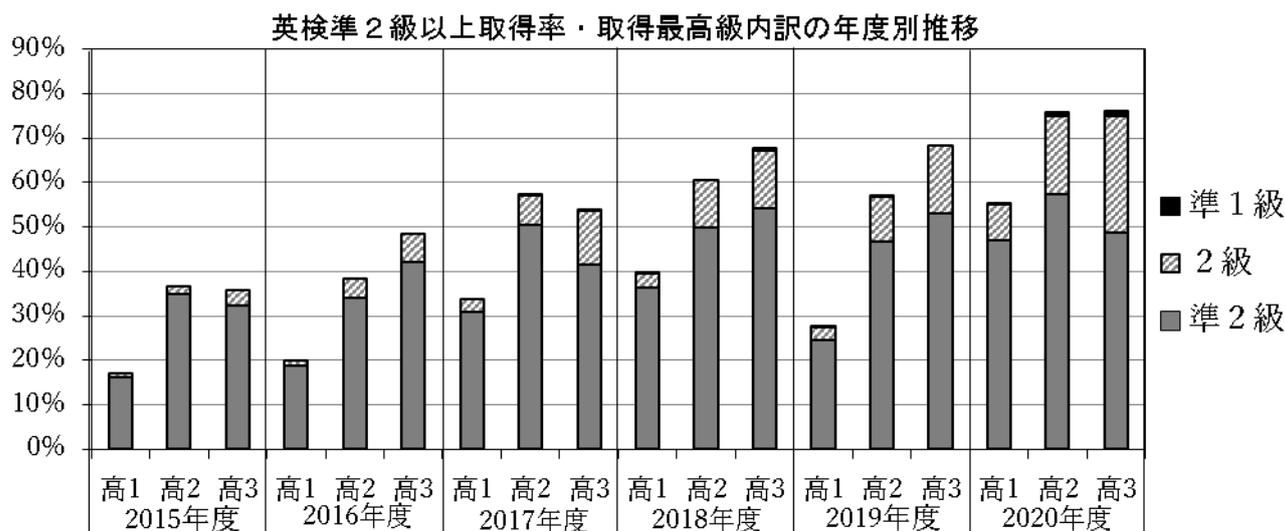
### 3. 訪日団・留学生受け入れに関する評価

2020年度の受け入れは、アジア高校生懸け橋プロジェクトによるモンゴル人留学生1名のみであった。2019年度の受け入れ数は108名、2018年度は111名であったことを考えると、大変残念な状況であった。グローバル教育の根幹は、あくまでも人々の交流を通して学ぶことにあるので、いかんともしがたい現状であった。これらについて、リモートによる交流等も考えられるが、受入れ幹旋事業そのものが中止されたため、そうした要請も叶わなかった。

#### 4. 語学検定に関する評価(英検)

英検は準 2 級以上取得率が高校の各学年とも上昇した。今後は、2 級、準 1 級取得者の割合を、さらに増加させたい。

文部科学省が 2020 年度までの達成目標としている「英語力」は、<高校3年卒業時 英語検定「準2級」以上 50%以上>となっているが、年々到達者の割合が増え、とりわけ 2020 年度は 2 級取得者が上昇した



#### ◆まとめ

学校設定教科「グローバル探究」で実施した各科目について、「課題発見—課題研究—課題解決—発信」といったサイクルを確立して行ったため、生徒の探求学習に成果があった。特例の教育課程の実施に基づき、従来の教科縦割りの教育活動では生み出しにくい有機的な成果があげられたといえる。コロナ禍ということで、その集大成としての海外語学研修等が実施できなかったことが残念である。

特例の教育課程を実施させて頂いたことを嚆矢に、本校のグローバル教育全体が長足の進歩を遂げることができた。特に生徒の積極性や主体性、異文化理解のあり方、語学検定への取り組み姿勢並びにその成果の向上に大きく寄与した。

本校のグローバル教育で育成を図るグローバル人材像、

- ・伝統文化に裏付けられた日本人としてのアイデンティティを有する人物
- ・世界の多様な文化を理解し、彼らと共生できる能力を有する人物
- ・地球的課題の本質を見抜く力及び解決を主導する能力を有する人物
- ・世界の人々と協調しながら情報を共有し、意見を発信する能力を有する人物

以上の 4 点を体現していくために、特例の教育課程を適用しての実践は極めて有為な取り組み

であった。

また、この成果を、年度末に「2020グローバル人材育成事業 活動報告」として冊子にまとめ、生徒、保護者、学校関係者、市役所、図書館等に配布した。

#### ◆学校関係者からの評価について

担当者からの他の校内の教員及び管理機関への連絡については、以下のような手順で実施した。

- 4 月 グローバル探求の各科目のシラバス及び年間予定、関連する行事を学校関係者に連絡。
- 10 月 学校関係者に取り組み事業、成果を報告し、評価コメントをもらい、報告書の作成に入った。(例年は生徒発表等を行うが、2020年度はオンラインで教員が概要を報告。)
- 3 月 1年間の活動の成果と課題について、①主体性・積極性、②異文化理解、③課題探究・解決能力、④ICTスキル、⑤外国語能力、⑥プレゼンテーション能力、⑦コミュニケーション能力の7視点に基づき、各担当者が執筆し、「2020グローバル人材育成事業 活動報告」を作成し冊子にまとめた。全体について、その報告冊子をもって、学校関係者に成果報告し、評価をもらった。以上のような報告と検証を5年にわたり実施した。

学校関係者からは、当初の目的を概ね達成できている、またグローバル人材育成という観点では、教科「グローバル探求」の設置が大きな役割を果たした、という評価を頂いた。その一方、海外とのオンラインを用いた交流等、コロナ禍及び来るべき将来においてもっと有効に活用すべきとの評価もあった。